

ずいそう

北の海みちに思う



鮫島伸雄

秋田に転勤し、言語、唄、食文化が故郷小樽と共通していることが意外に多く驚いています。

江戸時代から続く、京都（舞鶴・敦賀）から北海道まで日本海を航海する北前船の文化とっていました。

たまたま新野直吉著「古代東北と渤海使」を読む機会を得、神亀四年（727）に第1回渤海使が出羽国（秋田）に着いたことを知りました。

（渤海国は満州から朝鮮半島北部、ロシア沿海地方に689年から926年まで存在した国家）その時通った航路が、沿海州沿岸を北上し間宮海峡を通り樺太から北海道沿岸沿いに南下し、津軽海峡を渡り東北沿岸沿いに秋田に到着したものです。これを北の海みちと称しています。

当時日本海側は秋田出羽柵・秋田城が大和朝廷の政治開拓の拠点基地であり、それ以北は蝦夷の国でした。

宝亀十年に第11回使として359人が帰化を望み来航しているが、翌年認めず送り返しています。

渤海使は延喜十九年（919）第34回が最後となっています。

古くは古代縄文時代より北の海みちを通して交流が行われており、公の使いではない民間交流はもっと多くあり、当然血の交流もあったものと思われま

す。文字のあった大和朝廷には文献として記録が残っていますが、文字のなかった北方民族蝦夷との交流はもっとずっと多かったものと推測されます。

また、大和朝廷の出先である秋田城を窓口として蝦夷を仲介とした交流もあったはず

です。男鹿市にある赤神神社五社堂には昔、漢の武帝に連れてこられた五匹の鬼達が食べ物や女たちを略奪する

など村を荒らしまわり、困り果てた村人たちは、娘を差し出すことを条件に五社堂まで千の石段を積み上げることを約束させ、九九九段積上げ、あと一段という時に一番鶏の鳴き真似をして追い払ったという伝説があります。

また有名な男鹿のなまはげはこの鬼であったとする伝説もあります。

現在男鹿半島一帯の村落ごとに異なる面のなまはげが伝わり、神様の使いとされています。

北の海みちを通り漂着、移住した異形の者達が山奥で暮らし、年に一度里に下りて来て村人と交流したものと考えても不思議ではないでしょう。

秋田美人や秋田県民はロシア人がルーツであるとの俗説が流布されることもありますが、コーカソイド（白色人種）の遺伝子を確認されたことは無いとのこと

です。現ロシア領のシベリアから極東までの地域では古代からのモンゴロイドのブリヤート人、ヤクート人、エヴェンキ人、ツングース人との関連性は遺伝的に証明可能のようです。

北の海みちを通して、長い交流の歴史の中で多くの血の交流もあったものと思われま

す。著作権の関係で写真を掲載出来ませんが、秋田県PRポスター「秋田おぼこ」のモデル柴田洋子さんが秋田美人の代表と個人的には思っております（なお撮影は昭和28年モデル19歳、カメラマン木村伊兵衛）。

ポスターが数多く配布され、ネットでも公開されていますので、機会がありましたら是非一度ご覧下さい。

戦前には樺太航路もあり日本海を横断する航路も多数あり、北の海みちは継続されてきましたが、戦後は冷戦で日本海航路は減少、裏日本とされ、交流も多

くはありませんでした。ソ連の崩壊後ロシアのシベリア資源開発が進み、ウラジオストック、樺太までの石油・ガスパイプラインはまさに北の海みちと重なり、今後日本にどのように伸びてくるのか楽しみです。

古代から続く北の海みちは、今後もさらに形を変えながらも継続するものと思

